

野 芥 遺 跡 6

— 第16次調査報告 —

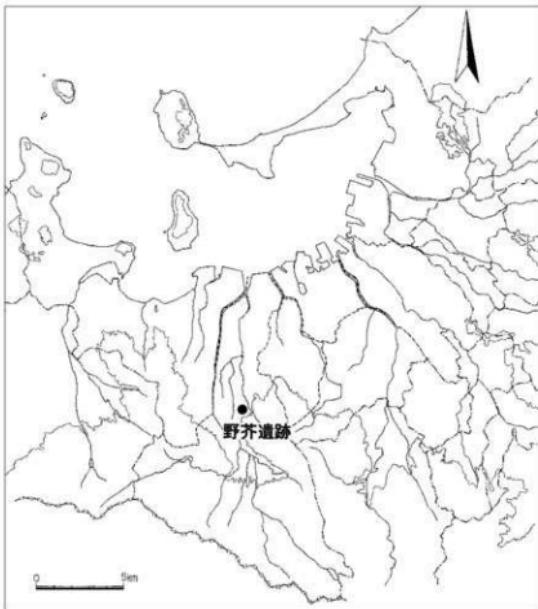
2 0 1 5

福岡市教育委員会

野芥遺跡 6

— 第16次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1263集



遺跡略号 調査番号
NKE-16 1203

2015

福岡市教育委員会

序

福岡市は玄界灘を介して大陸・半島と一衣帶水の関係にあり、古代より双方の交流が絶え間なくおこなわれてきました。なかでも旧早良郡には、旧石器時代から中世にかけての遺跡が数多く存在します。近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、病棟の建築に伴う野芥遺跡第16次発掘調査について報告するものです。この度の調査では奈良時代の柱穴・室町時代の溝などを検出し、油山山麓における土地利用のありかたを示す貴重な資料を得ることができました。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の一資料として活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、事業主様をはじめとする関係者の皆様には発掘調査から本書の作成に至るまで深いご理解と多くのご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

平成27年3月25日

福岡市教育委員会
教育長 酒井 龍彦

例 言

1. 本書は、福岡市教育委員会が病棟建築に伴い、福岡市早良区野芥5丁目266番1において実施した発掘調査である野芥遺跡第16次発掘調査の報告書である。
2. 本書に掲載した遺構実測図は阿部泰之が作成した。
3. 本書に掲載した遺物実測図は平川敬治が作成した。
4. 本書に掲載した挿図の製図は阿部がおこなった。
5. 本書に掲載した写真は阿部が撮影した。
6. 本書で用いた方位は特に断りなき限りすべて磁北で、真北から $6^{\circ} 30'$ 西偏する。
7. 遺構の呼称は溝をSD・土壙をSK・ピットをSPと略称する。遺構番号は発掘調査の際、現場で任意に振った通し番号をそのまま用いた。
8. 本書にかかわる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。
9. 本書の執筆は阿部がおこなった。
10. 本書掲載の埋蔵文化財包蔵地の範囲は平成26年3月現在の推定線であり、現在は変更される可能性がある。詳細は福岡市文化財部埋蔵文化財審査課に確認されたい。
11. 本書で報告する発掘調査の細目は以下の通りである。

遺跡名	野芥遺跡	調査次数	16次	調査略号	NKE-16
調査番号	1336	分布地図図幅名	重留	遺跡登録番号	020319
申請地面積	14,783.62 m ²	調査対象面積	514 m ²	調査面積	454.5 m ²
調査期間	平成25(2013)年12月9日～平成26(2014)年3月7日	事前審査番号	25-2-609		
調査地	福岡市早良区野芥5丁目266番1				

本文 目 次

はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査組織	1
第1章 位置と環境	3
第2章 調査の記録	7
1. 調査概要	7
2. 遺構と遺物	7
第3章 まとめ	17

挿 図 目 次

Fig. 1 野芥遺跡と周辺の主な遺跡 (1/25,000)	2
Fig. 2 調査区位置図 (1/4,000)	4
Fig. 3 調査区位置図 (1/1,000)	5
Fig. 4 調査区全体図 (1/200)	6
Fig. 5 調査区北壁土層断面実測図 (1/50)	7
Fig. 6 SD06・23実測図 (1/60・1/30)	8
Fig. 7 SD06・23出土遺物実測図 (1/3)	9
Fig. 8 SD16・35実測図 (1/100・1/50)	10
Fig. 9 SD16・35出土遺物実測図 (1/3)	11
Fig. 10 SD40実測図 (1/60・1/40)	12
Fig. 11 SD40出土遺物実測図 (1/3)	13
Fig. 12 SK24出土遺物実測図 (1/3)	13
Fig. 13 SK24・25実測図 (1/30)	14
Fig. 14 ピット等出土遺物実測図 (1/3)	15
Fig. 15 検出面・その他の出土遺物実測図 (1/3)	16
Fig. 16 推定「野芥大聖寺別院」関連遺構配置図 (1/1,000)	18

図 版 目 次

- PL. 1 調査区北半全景（南より）
- PL. 2 調査区中央部全景（西より）
- PL. 3 調査区中央部西側全景（北より）
- PL. 4 調査区南部全景（西より）
- PL. 5 調査区北壁土層（南より）
- PL. 6 調査区南西壁土層（東より）
- PL. 7 SD06（西より）
- PL. 8 SD16・35（西より）
- PL. 9 SD23（西より）
- PL. 10 SD23東壁土層（西より）
- PL. 11 SD16西壁土層（東より）
- PL. 12 SD16中央部土層（北より）
- PL. 13 SD35土層（北より）
- PL. 14 SD40（西より）
- PL. 15 SD40西壁土層（東より）
- PL. 16 SK24・25（北より）
- PL. 17 調査区中央東側柱穴列（東より）
- PL. 18 SD40出土軒丸瓦

はじめに

1 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市早良区野芥5丁目266番1（敷地面積14,783.62m²）における病棟建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成25年9月13日付で受理した（事前審査番号：25-2-609）。

これを受けて文化財部埋蔵文化財審査課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である野芥遺跡に含まれていること、敷地内で過去に複数回の発掘調査がなされていること、平成25年10月28日に確認調査を実施し遺構が確認されたことから、遺構の保全等に関して申請者と協議を重ねた。その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、病棟建設部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成25年11月22日付で医療法人浜江堂を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年12月9日から発掘調査を、翌平成26年度に資料整理・報告書作成をおこなうこととなった。

2 調査の組織

調査委託：医療法人 浜江堂

調査主体：福岡市教育委員会

調査統括：文化財部 埋蔵文化財調査課長

宮井善朗（平成25年度）

常松幹雄（平成26年度）

調査第1係長

常松幹雄（平成25年度）

吉武 学（平成26年度）

調査庶務：埋蔵文化財審査課 管理係

川村啓子

事前審査：埋蔵文化財審査課 事前審査係長

加藤良彦（平成25年度）

佐藤一郎（平成26年度）

事前審査係主任文化財主事

佐藤一郎（平成25年度）

池田祐司（平成26年度）

事前審査係文化財主事

比嘉えりか

調査担当：埋蔵文化財調査課 調査第1係文化財主事

阿部泰之

下図の埋蔵文化財包蔵地の範囲は平成26年3月現在の推定線であり、現在は変更されている可能性があります。また、本文に直接関わらない遺跡は一部省略しています。



Fig. 1 野芥遺跡と周辺の主な遺跡 (1/25,000)

1. 野芥遺跡
2. 野芥大裁遺跡
3. クエゾノ遺跡
4. 飯倉H遺跡
5. 飯倉G遺跡
6. 梅林遺跡
7. 千隈古墳群
8. 飯倉F遺跡
9. 飯倉E遺跡
10. 千隈古墳群D-1号墳
11. 梅林古墳
12. 中尾北遺跡
13. 馬ヶ原古墳群
14. 露ヶ瀧古墳群
15. 西油山古墳群
16. 次郎丸高石遺跡
17. 免遺跡
18. 田村遺跡
19. 四箇遺跡
20. 四箇東遺跡
21. 重留遺跡
22. 四箇船石遺跡
23. 岩本遺跡
24. 重留村下遺跡
25. 熊本遺跡
26. ヒワタシ遺跡
27. 重留古墳群
28. 拝塚古墳

第1章 位置と環境

現在の福岡市の中西部に位置する早良平野は、背振山系から発した室見川とその支流によって形成された沖積平野である。現在は市街地化が進み旧状はほとんど窺えないが、もとは広大な農村地帯であった。この平野はその東部に南北方向の低丘陵を有し、東に隣接する福岡平野とはこれによって区されている。本丘陵は福岡市南部に位置する油山から発しており、長年の浸食作用によって多くの谷が複雑に入り組んでいる。大規模な整地が繰り返され地形の変化が顕著だが、各丘陵にも多くの谷が入り込むほか、急峻な崖となる地点も多く複雑な地形をなしていることが今でも見て取れる。その丘陵上には多くの遺跡が存在し、野芥遺跡はその南部、油山北麓にある。今回報告する第16次調査地は遺跡の南部、丘陵東縁辺に位置する。

野芥遺跡は、旧石器時代から中世に至る時期の遺構・遺物が認められ、当該地域は現代に至るまで1万年以上の期間人間によって利用されてきたといえよう。ここでは、既往の調査例から野芥遺跡とその周辺の、旧石器時代から中世に至るまでの状況を追っていきたい。

旧石器時代は、野芥遺跡南部、今回報告する16次調査地周辺で多くの遺物が出土している。とりわけ第7次調査区ではくぼみ状の不定形土壙2基が検出され、ベン先形ナイフ形石器が出土している。16次調査区の西に隣接する第11次調査区では縄文時代前期の遺物を含む遺物包含層から角錐状石器・ナイフ形石器が出土した。何れも後期旧石器時代後半期の遺物である。

縄文時代では、明瞭な遺構の検出例はみられないが、遺物は第11次調査区で検出された遺物包含層から早期後半頃の土器細片・石鏃が出土しているほか、第2次調査区で晩期の研磨土器が出土している。遺跡のさらに南端の尾根上に当該期の集落が存在した可能性は高い。

明瞭な遺構が確認できるのは弥生時代以降である。第3次調査区では貯蔵穴群が、第4次調査では竪穴住居址や土壙が検出されており、遺物は第4次調査区から弥生時代中期以降の土器がまとまって出土している。大規模な集落の存在を推測させるが、後世の大規模な造成で丘陵の地形が変化しているため全貌の把握は困難である。

古墳時代では、拝塚古墳や梅林古墳など油山周辺に前方後円墳が築造され、大規模な集落の形成がなされる。野芥遺跡では後期になると遺構が増加する。第1次・2次・4次・11次調査区で竪穴住居址や掘立柱建物跡が検出され、遺跡が位置する丘陵上に大規模な集落が形成されたことがわかる。油山北麓には後期群集墳が多数存在し、これら小規模な古墳の被葬者には野芥遺跡の住人も含まれていよう。

古代の遺構としては、第4次調査区で大規模な掘立柱建物跡が複数検出されている。ここでは円面硯など一般的な集落とは異なる遺物が出土しており、古代早良郡「能解郷」の中心とされる。

中世には、第4次調査区では溝で区画されたなかに石敷きがなされた池状の遺構や八角形をなす建物跡が、第11次調査では池状の遺構が検出されている。また7次調査や今回報告する16次調査を含め、鬼瓦や軒瓦を含む瓦類が多数出土しており、中世寺院の存在が想定される。文献資料からは野芥大聖寺の存在が知られ、この寺院との関連は不確実であるが、油山には天福寺など中世寺院が複数存在し、今回報告する第16次調査地の周辺に寺院関連の施設が存在した可能性は高い。

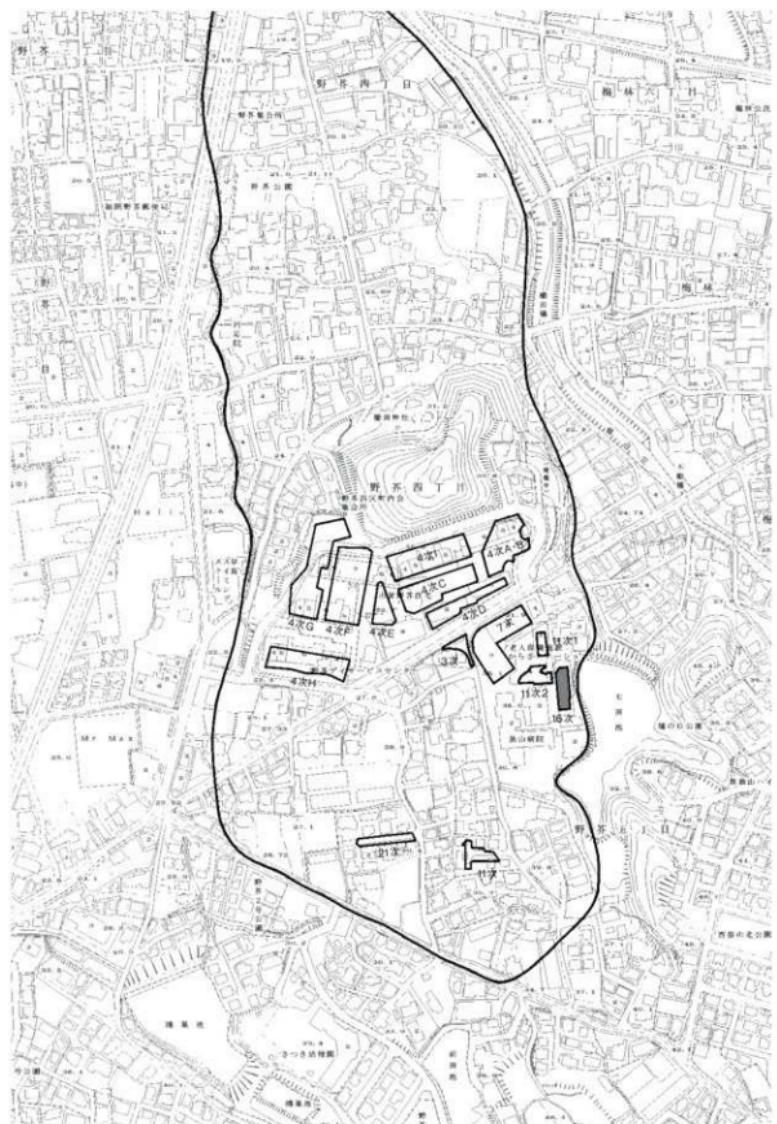


Fig. 2 調査区位置図 (1/4,000)



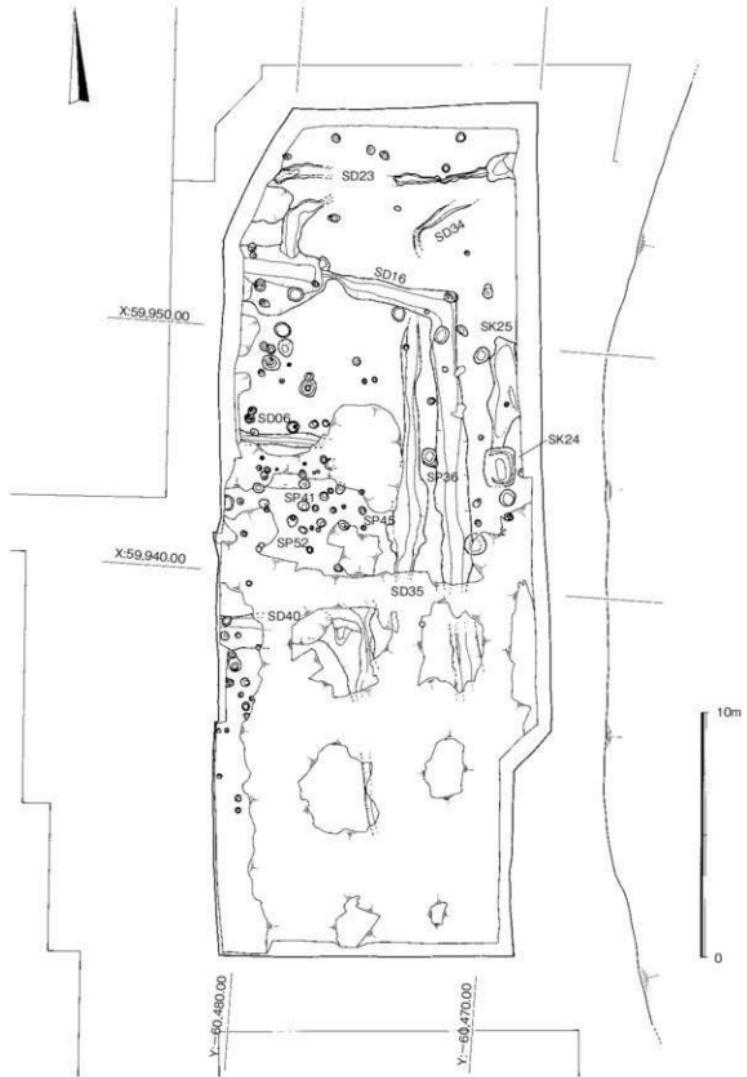


Fig. 4 調査区全体図 (1/200)

第2章 調査の記録

1. 調査の概要

今回の調査地は野芥遺跡の南東縁辺部、丘陵谷部を利用した七田池との境界付近に位置する。

今回の調査は、12月2日、事業者との最終的な現地確認をおこなうことから始まった。同月9日に現場に器材を搬入、翌日に重機を投入し1回目の機械掘削を実施した。その後1月11～15日に第2回、2月6～10日に第3回の機械掘削・残土反転を実施し、同月24・25日に埋め戻し、3月7日に器材を撤収し発掘調査を終了した。

調査区は埋設管や既存の樹木を避けつつできる限り広く設定することに努め、調査面積は 454.5m^2 を測る。

遺構面は現地表面下 $-0.8\sim-0.3\text{m}$ 、標高34m前後の明黄褐色～灰白色粘質土上である。全体に削平されており遺構の残りは良好とはいえない。遺構面は南西隅部がもっとも高く、北東隅に向かって標高を下げる。遺構面となる地山と上部の盛り土との境界は明瞭で、重機での表土掘削時にはこの境界から剥がれるように上部の堆積層を除去できた。

今回の調査で検出した遺構は、溝4条・土壙1基・柱穴多数である。出土した遺物から、溝は15世紀～16世紀に埋没していると推測される。埋土には粘質土層が観察されるものがあり、水路としての機能が想定される。土壙は人為的に埋められる。遺構の埋土には暗灰色と明灰色の2種類が認められるが、明瞭な時期差は確認できなかった。

遺物は、溝から巴文を有する軒丸瓦片が出土した。遺構埋土に含まれる形で黒曜石製打製石鏸が出土したが、西に隣接する第11次調査のような旧石器～縄文前期の遺物包含層は検出されなかった。

2. 遺構と遺物

①溝 (SD)

SD 06 (Fig. 6)

調査区北部にて延長3.3mを検出した。東西方向に伸びる溝で、東端は攪乱に切られ、西端は調査区外に伸びる。幅40～60cm・深さは10cmに満たず浅い。

土層断面図をFig. 6に示す。埋土は暗灰色を呈し单一の層で構成され、均一で自然堆積層である。流水の痕跡は窺えない。

出土遺物 (Fig. 7)

1は白磁皿である。1/4個体残存する破片で、口縁部にくぼみ

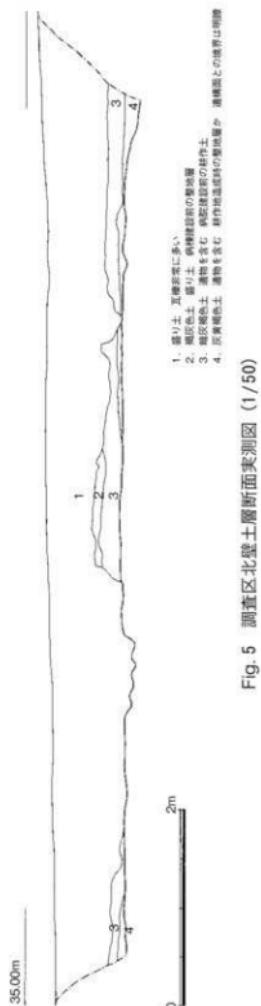


Fig. 5 調査区北壁土層断面実測図 (1/50)

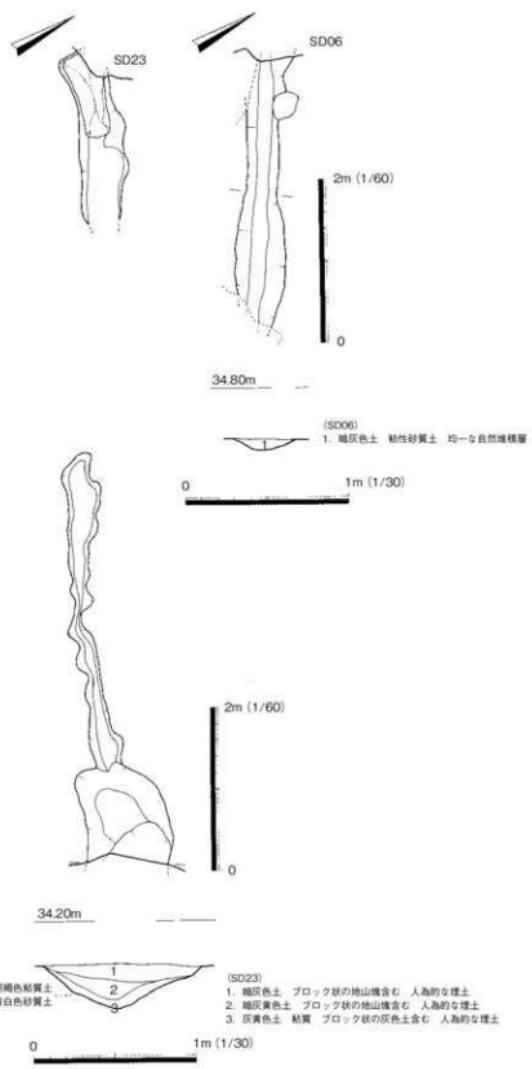


Fig. 6 SD 06・23 実測図 (1/60・1/30)

が2か所観察され、輪花状とする。口径10.2cm・底径3.0cmに復元され、器高2.1cmを測る。外底面を除き全面に施釉される。

2・3は土師器である。2は小皿の小片で、口径8.2cmに復元される。3は壊か。口縁部の小片で口径12.6cmに復元されるが不確実。2点とも器壁は摩滅し調整は不明瞭である。

SD23 (Fig. 6)

調査区北部にて延長11.0mを検出した。東西方向に延びる溝で、削平のため中央部は失われる。東端部には花崗岩の巨礫が検出された。遺構面の明黄褐色粘質土に入り込んでおり地山に含まれるものでそれを残して溝を構築したものと推測される。幅20~60cm・深さは10cmに満たず浅いが、西端では幅110cm・深さ28cmと規模を増し、調査区外に延びる。

土層断面図をFig. 6に示す。埋土は3層に分かれて何れも人為的に埋めている。第2層と第3層の間で不整合となり、この境界で掘り直している可能性がある。

遺跡が乗る尾根から谷に向かって排水溝と考えたが、土層からは流水の痕跡は窺えず性格は不明である。

出土遺物 (Fig. 7)

4~6は須恵器である。4は底部のみ残存する破片で、壺または瓶、鉢の可能性もある。底径10.6cmを測り、外底面には粗いヘラ切り痕が残る。5・

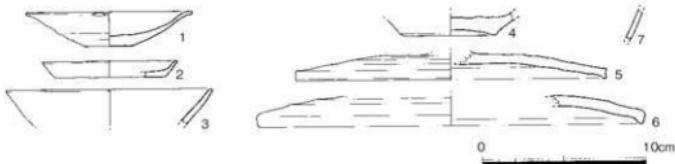


Fig. 7 SD06・23出土遺物実測図 (1/3)

6は蓋の小片である。5は口径19.0cmに復元される。器壁は白色味を有し焼成はやや不良である。6は口径23.8cmと大形の個体に復元される。7は灰釉陶器か。小片のため不確実。

SD16 (Fig. 8)

調査区中央部にて延長25.5mを検出した。北部では東西方向に延び、延長9mで南に鈍角に折れて伸び、16.5mで攪乱に切られた延長は失われていた。削平のため遺存状態は不良で、おむね幅70～140cm・深さ10～20cmを測る。だが西端部は幅2.3～2.9m、深さ40cmと広く深くなり、北方へさらに1条の溝が伸びていたと推測されるが、延長2.8mの痕跡を残すのみで延長は不明である。平成15年度に実施した第11次調査ではこの深い部分の延長線上に池状遺構SX101と、そこから伸びる溝が検出されており、埋土の状況も類似するためこれに接続するものとみられる。

のことからSD16には、池状の掘りこみに水を溜め、溝に沿って低地に配水する機能が想定されよう。

土層断面図をFig. 8に示す。西端の調査区壁面A-A'では2層に分かれ、下層は粘質が強く均一な堆積で、一部に砂が混じるなど流水と滞水を繰り返す環境にあったと推測される。上層との間は不整合で、最低1回の掘り直しが想定できる。埋土の上層はFig. 5に示す第4層で、調査地周辺が畑として造成されるまで本遺構はくぼみとして地表に残っていた可能性がある。

南北方向に屈曲後の土層B-B'では、下層は同じ土質だが上層は人為的に埋めた埋土とみられ、使用停止後に埋め戻されたことがわかる。

出土遺物 (Fig. 9)

1は土師質土器である。底部を欠く鉢の小片で、口径26cm前後に復元されるが口縁部がほとんどなく、傾きとも不確実である。

2は瓦器か。底部の小片だが焼成は不良で摩滅が顕著のため不確実である。3は須恵器である。坏底部の小片で、底径9.0cmに復元される。

4は褐釉陶器である。鉢の小片で底部を欠く。口径29.4cmに復元され、器壁は薄く焼成は良好である。5は高麗陶器である。体部の小片で、内外両面とも白土による象嵌を有し、灰緑色の釉が施される。

6～9は龍泉窯系青磁である。6・7は皿である。口縁部の小片で、6は焼成がやや不良、7は内面に花文を有し、透明感ある淡緑色に施釉される。8・9は碗である。8は体部の小片で、外面に蓮弁文を有し灰緑色の釉が薄く施される。9は口縁部の小片で、口径14.4cmに復元されるが不確実。外面に雷文を有し透明感ある淡緑色に施釉される。

10～13は平瓦である。何れも小片で全体の形状がわかるものはない。10は残存長5.9cmを測り、焼成は不良で器壁は摩滅、調整は不明瞭である。11は隅角部が残り、残存長6.7cmを測る。にぶい褐色を呈し焼成は不良で調整は不明瞭だが、ナデにて仕上げられる。12は側縁が残る個体で、残存長

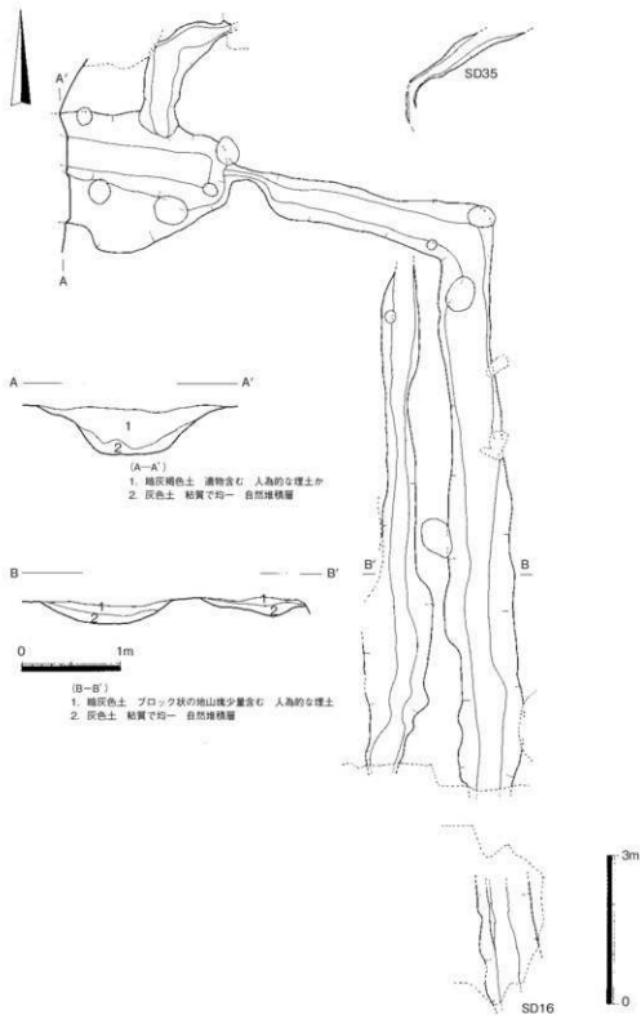


Fig. 8 SD16・35実測図 (1/100・1/50)

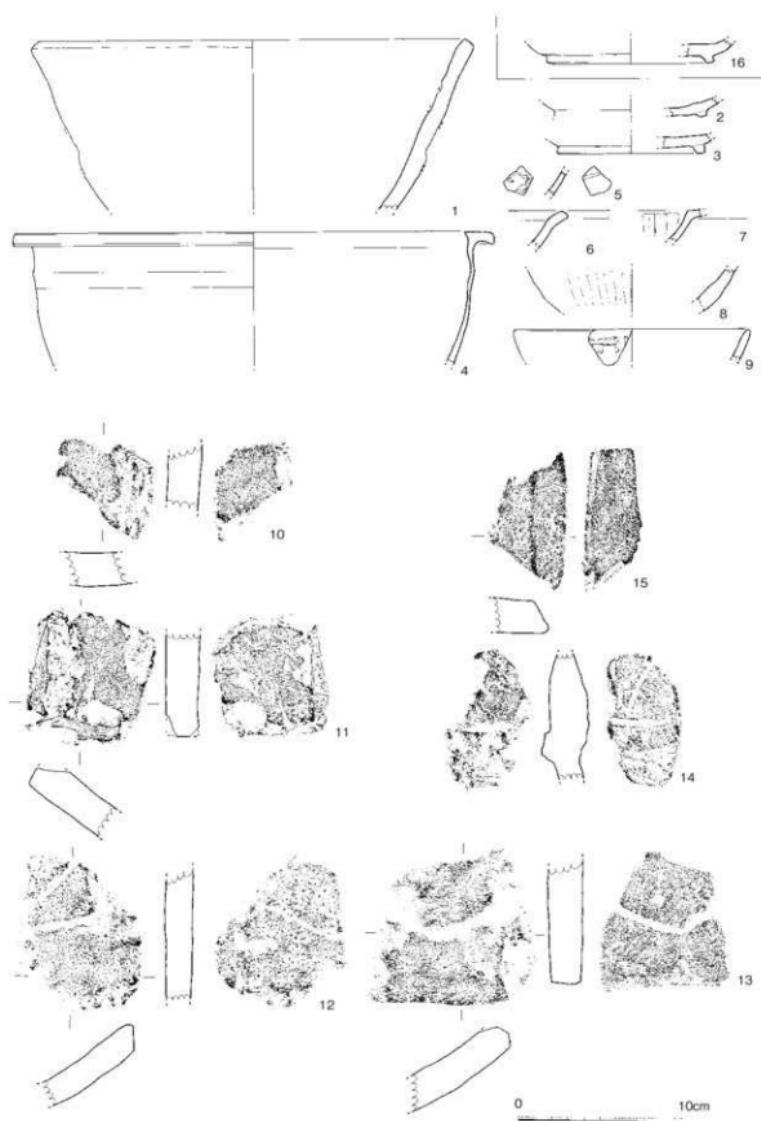


Fig. 9 SD 16・35出土遺物実測図 (1/3)

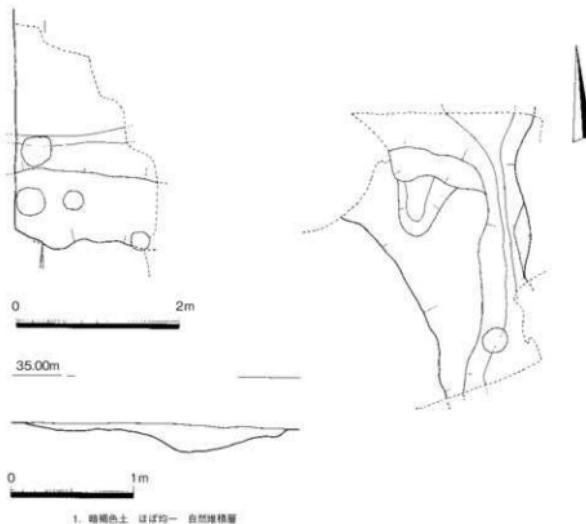


Fig. 10 SD40実測図 (1/60・1/40)

9.1cmを測る。焼成は不良で摩滅が著しく外面の調整は不明である。13は小口部が残る小片。残存長8.0cmを測る。にぶい褐灰色を呈し焼成は不良で調整は不明瞭である。

14は丸瓦である。受け部の小片で、残存長8.4cmを測る。焼成はやや不良で器壁は摩滅するが、凹面の一部に縄目叩き痕が観察される。15は平瓦だが、薄く丁寧に作られ道具瓦の可能性があるもの。側縁が残る小片で残存長8.5cmを測り、器壁は摩滅するが全体がナデにて仕上げられる。

SD35 (Fig. 8)

調査区北部にて延長10.3mを検出した。SD16の南北方向部分に平行して検出され、幅40～140cm・深さ10～20cmとSD16に類似する。土層断面をFig. 8に示す。埋土はSD16と堆積状況を

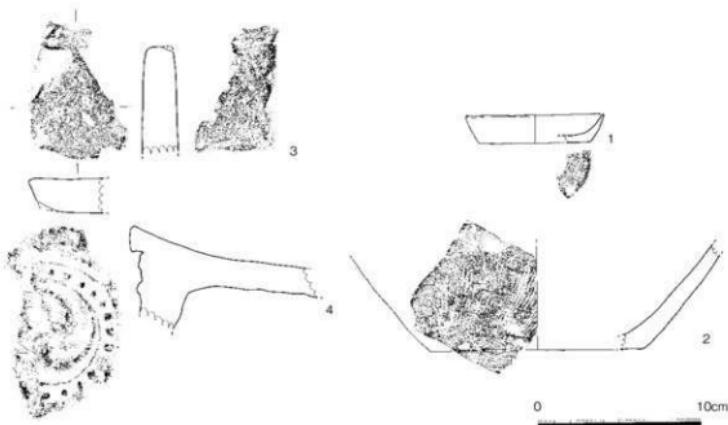


Fig. 11 SD40出土遺物実測図 (1/3)

含めきわめて類似しており、調査区全体に及ぶ削平のため本来の形状は不明瞭だが、SD16と接続して同一の溝をなしていた可能性が高い。

出土遺物 (Fig. 9)

16は須恵器である。壺の底部で、底径10.2cmに復元されるが小片のため不確実である。焼成はやや不良で器壁は明灰色を呈する。

SD40 (Fig. 10)

調査区南部にて、延長14.4mを検出した。北部では東西方向に延び、延長5.5mで南にほぼ直角に折れて伸び、約9mで攪乱に切られて延長は失われていた。

削平と攪乱のため遺存状態は不良で、おおむね幅230cm・深さ10~20cmを測る。壁面は緩く傾斜し、底面はさらに1段深く掘りこまれ、断面形は不整なY字形を呈する。

土層断面図をFig. 10に示す。埋土は削平のためもあるが単一の層で構成されており、均一で流水の痕跡は認められず、自然堆積である。

建物跡が検出されず確証に欠けるが、何らかの施設を区画した溝であろうか。

出土遺物 (Fig. 11)

1は土師器小皿である。器壁は摩滅するが外底面は平坦で回転系切りにて切り離されたもの。口径

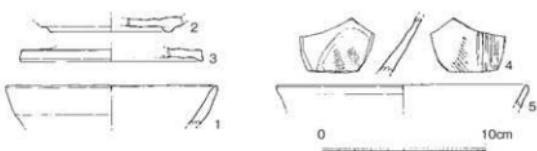


Fig. 12 SK24出土遺物実測図 (1/3)

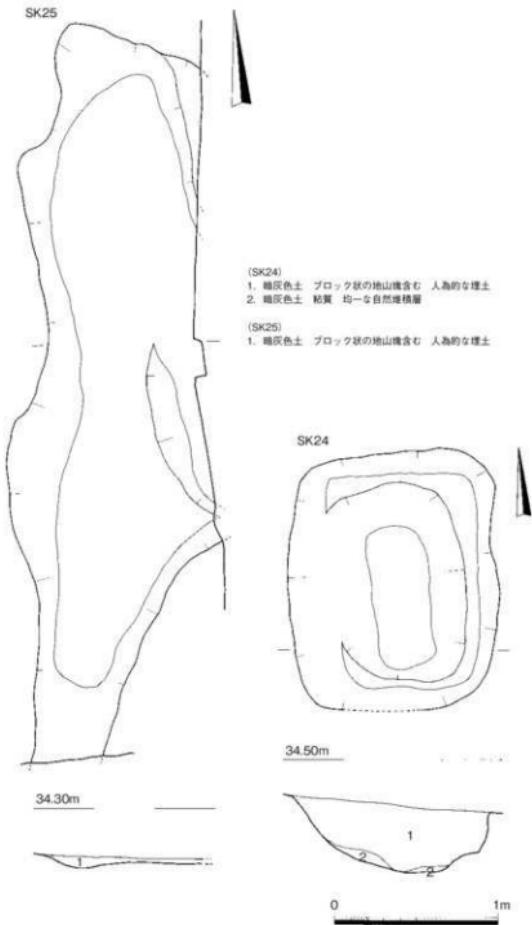


Fig. 13 SK24・25実測図 (1/30)

8.4 cm・底径6.8 cmに復元されるが小片のため不確実である。2は瓦質土器である。捏鉢の小片で、底径12.8 cmに復元されるが不確実。焼成は不良で摩滅が顕著である。

3は平瓦か。側縁をわずかに残す。ただし縁辺部にくぼみが認められ、道具瓦の可能性がある。全体に褐味を帯びて焼成は不良で、外面の調整は不明瞭。残存長6.5 cmを測る。4は軒丸瓦である。瓦当を残し、上端は上に反る。残存長11.5 cmを測り。瓦等部は径12.4 cmに復元される。瓦当には巴文で外周に圓線を有し、外区の珠文は23～24個と推測される。焼成は不良で全体に明灰色を呈し、摩滅

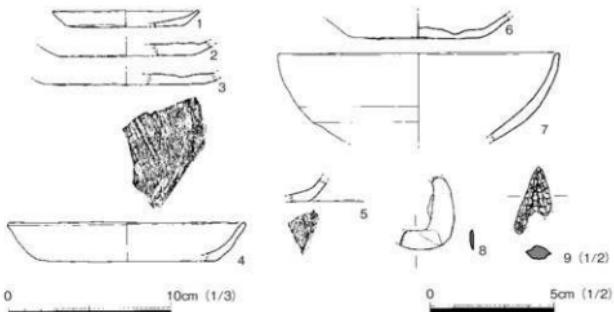


Fig. 14 ピット等出土遺物実測図 (1/3・9のみ1/2)

が顕著で調整は不明である。

②土壤 (SK)

SK24 (Fig. 13)

調査区東縁辺部にて検出した。SK25を切り、平面隅丸長方形を呈する土壤である。長径160cm・短径110cmを測り、西壁をのぞく3方にテラスを有し、断面形はおむね逆台形を呈する。

土層断面図をFig. 13に示す。埋土は2層に分かれる。下層は粘質土の均一な自然堆積層で、土壤内部が滯水する環境下であったことがわかる。上層は人為的な埋土で下層との間は不整合となり、最低1回の掘り直しがなされている。このことから、SK24は何かを埋めるためのものではなく、水を溜めるなど開口したままメンテナンスを受け、その役割を果たしていたものと考えられる。

出土遺物 (Fig. 12)

1は土師器である。坏の口縁部でやや焼成不良。口径13.0cmに復元されるが小片のため不確実である。2・3は須恵器である。2は坏。底部の小片で、底径8.0cmに復元される。3は高坏である。底部の小片で、底径11.2cmに復元される。

4は同安窯系青磁碗である。体部の小片で、内外両面に櫛描文が施され、灰緑色の釉が薄く施される。器壁は光沢を失っており、被熱したものか。5は青磁碗である。同安窯系か。口縁部の小片で、口径15.4cmに復元される。釉調は透明感ある灰緑色である。

SK25 (Fig. 13)

調査区東縁辺部にて検出した。SK24に切られ、南北方向に長軸を持つ不整形の造構で、ここでは暫定的に土壤として報告する。長径4.6m以上・短径1.26m以上を測るが、深さは10cm未満と浅い。土層断面図をFig. 13に示す。埋土は単一の層によって構成され、人為的は埋土である。

遺物は土師器細片が5号のビニール袋1袋程度出土している。

③柱穴・ピット (S P)

今回の調査では計110基のピットを検出したが、掘立柱建物跡や堅穴住居跡は検出できなかった。ただし柱痕跡を残す柱穴を複数検出したほか、3基が並ぶ状況もみられるため、本来は複数の建物が構築されていた可能性が高い。以下、柱穴・ピットから出土した遺物、これまでの報告から漏れた遺物について報告するもの。

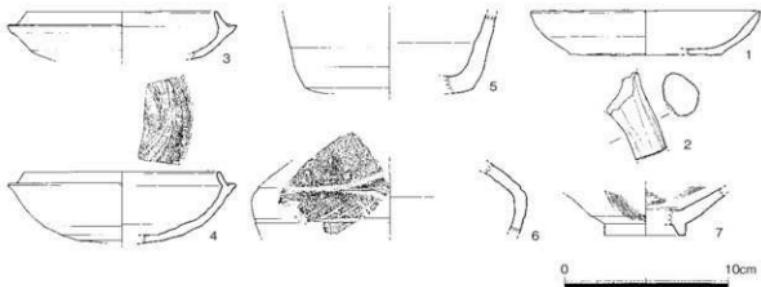


Fig. 15 検出面・その他の出土遺物実測図 (1/3)

(Fig. 14)

1～5は土師器である。1はSP41出土の小皿である。1/4個体残存する破片で、口径9.0cmに復元される。器壁は摩滅し調整は不明。2・3は壺の底部である。2はSP07出土。底径8.2cmに復元される。3はSD06出土。外底面に板状圧痕が残る。底径10.2cmに復元される。4はSP45出土の壺である。口径14.6cmに復元される。何れも器壁は摩滅し遺存状態は不良である。5はSP34出土。壺の小片で、外底面には回転ヘラ切り痕が残る。

6は須恵器壺である。SP36出土。底部の小片で底径7.0cmに復元される。7は瓦器ないし土師器碗である。SP52出土。底部を欠く小片で、口径17.2cmに復元される。

いずれの個体も小片のため、復元径は不確実である。

8は鉄製品である。U字形の一端が失われた形状で、断面からは鉄部が良好に残存するのがわかる。器種・用途は不明である。残存長4.4cmを測る。

9は黒曜石製打製石鏃である。SP01出土。やや透明感ある石材を用いる鉄形鏃である。片方の脚部を欠損し、器長2.8cmを測る。

④その他の遺物

遺構検出面およびその他の出土遺物をFig. 15にまとめて図示した。

(Fig. 15)

3は出土位置不明、他は遺構検出面から出土した。

1は土師器である。壺の小片で、口径14.0cmに復元され、器高2.8cmを測る。器壁は摩滅し調整は不明である。2は瓦質土器である。脚の小片で、大内系の脚付鍋の一部と推測される。残存長5.2cmを測る。

3～6は須恵器である。3・4は壺身である。いずれもかえり部は低く内傾する3は口径14.0cmに復元される。4は内底面に当て具痕を有し、口径14.0cmに復元される。いずれも胎土は精良で焼成は良好である。5は鉢か。底部の小片で底径10.4cmに復元される。器壁は橙色を呈し焼成は不良である。6は壺ないしハソウ。胴部の小片で、胴部径16.8cmを測る。焼成はやや不良で内面は橙色を呈する。

いずれの個体も小片のため復元径は不確実である。

7は同安窯系青磁碗である。底部の小片で、底径5.0cmに復元される。外面に櫛描き文、内面に草花文を有し外面は露胎、内面には透明感ある灰緑色の釉が掛けられる。

第3章　まとめ

今回の調査では、古墳時代末～古代の柱穴・鎌倉～室町期の溝・土壙が検出された。調査地は丘陵尾根の縁辺部にあたり、遺構・遺物とも少ない傾向であった。

今回の調査地に関しては遺構面の下部に砂やシルトがラミナ状に堆積する部分がみられるなど水成の堆積層であることを示す状況がみられ、地山は丘陵本体を形成する段丘疊層と考えられる。既往の調査で検出された旧石器～绳文前期の遺物包含層はロームの再堆積層で、この層が検出できなかつたのは、調査地の地山が大きく削平されたか、丘陵尾根の縁辺部のために谷に向かって流出したためと推測される。油山の岩体を構成する本来の花崗岩とその風化土は、調査地の最も近くでは病院敷地南側尾根の西崖面で観察される。

今次調査区とその周辺では、関係各位のご理解とご協力により発掘調査が重ねられ、旧石器時代から室町時代にわたる遺跡の全容が明らかになりつつある。ここではその成果から、とくに中世の遺構について、「野芥大聖寺」との関連を考えてみたい。

上記「野芥大聖寺」だが、文献に記された記述は断片的である。『新修福岡市史 史料編』中世①所収「牛尾文書」大永6年（1526）7月17日付「飯盛宮神領坪付注文案」には、飯盛神社神領7段の作人として「野芥大聖寺」の名がみられるほか、編纂資料としては天正8年（1582）「荒平籠城家中諸侍家名到注文写」に寺方として「大聖寺」とある。『筑前国続風土記拾遺』野芥村の項には、觀音堂がありそこが大聖寺の址で、神松寺の末寺、承天寺の末々寺であることが記される。平凡社『福岡県の地名』野芥庄の項では、天文15年（1546）4月5日、大村興景が隆景に譲った所領中に「早良郡大聖寺半濟」が含まれていたとある。

これらの記述から、野芥大聖寺は博多承天寺と関係が深く16世紀前半には飯盛神社の領地耕作をおこない、16世紀中葉から後半にかけては戦乱と無関係でなく、時には近隣の山城に関係者が籠城することもあった、社会の動きに密接につながる中世寺院の姿が想像できる。

また、地元にお住いの方からの聞き書きとして、櫛田神社のある丘陵の北側を「大聖寺」という地名で呼んでおり、かつては丘陵の北麓に觀音堂があったとのことで、これが『筑前国続風土記拾遺』にある觀音堂であろうか。ならばに油山病院付近の地名は「別所」と呼称されていた。

今回の調査地周辺では、中世の遺構が全域から検出されている。溝・土壙・池状遺構・掘立柱建物跡があるが、池状遺構の中には瓢形の築山が付属するもの、溝とセットになるものがある。掘立柱建物跡の中には八角堂とみられる特殊なものが含まれる。

出土遺物は11世紀末～12世紀初頭頃から認められるが、数量は限定され大規模な集落が展開する状況ではない。これ以降、陶磁器など少しづながら断続なく遺物の出土が認められるが、集中するのは15世紀以降である。とくに第4次・第7次調査で鬼瓦を含む多数の瓦が出土し、今回の調査でも区画溝と考えられる溝から軒丸瓦が出土している。

おそらく、これらの瓦が葺かれた建物が野芥大聖寺の「別所」＝別院で、第4次調査で検出された八角堂とそれに隣接する築山を備えた池状遺構を中心とした伽藍であったと推測される。ただし立地する丘陵の幅は狭長で、建物の配置には地形の制約を大きく受けたものとみられるうえ、調査地周辺は後世の削平が顕著で伽藍配置の復元は困難である。

最後に区画溝以外の溝状遺構について記す。それらの溝は高所にある池状の遺構に接続するか、そのように推測される位置にある。これらの遺構には水が流れていたか、滞水していた状況が窺われるでの、具体的な根拠に欠けるが畑地に配水するための水路と考えたい。水上にある池に天水を溜める

か、さらに高所から水を引き入れ、多数配置した水路によって水下に配水したものであろう。野芥大聖寺との関連は、決め手に欠けるため不明とするしかないが、区画溝とは埋土の土質が異なり、推定野芥大聖寺別院廃絶後の遺構である可能性が強い。

これらのことから中世における調査地周辺の変遷をたどれば以下のとくくなろう。11世紀末～12世紀初頭頃に小規模な集落が形成され、その後状況に大きな変化はなかったが、15世紀のいずれかの段階に瓦葺き建物や築山を備える池が構築され、野芥大聖寺の別院とみられる。これらの建物廃絶後、水路が構築され畠地となり、おそらくその姿を大きく変えることなく近代を迎えたものと推測される。



Fig. 16 推定「野芥大聖寺別院」関連遺構配置図 (1/1,000)



1. 調査区北半全景（南より）



2. 調査区中央部全景（西より）



3. 調査区中央部西側全景（北より）



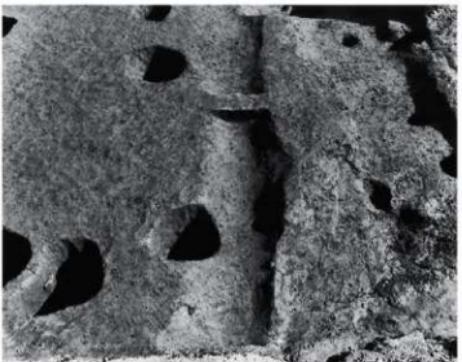
4. 調査区南部全景（西より）



5. 調査区北壁土層（南より）



6. 調査区南西壁土層（東より）



7. SD06 (西より)



8. SD16・35 (西より)



9. SD23 (西より)



10. SD 23 東壁土層（西より）



11. SD 16 西壁土層（東より）



12. SD 16 中央部土層（北より）



13. SD35土層（北より）



14. SD40（西より）



15. SD40西壁土層（東より）



16. SK 24・25 (北より)



17. 調査区中央東側柱穴列 (東より)



18. SD 40出土軒丸瓦

報 告 書 抄 錄

野芥遺跡 6

— 第16次発掘調査報告 —

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告 第1263集

平成27年3月25日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目1番8号

印 刷 株式会社 伸 和
福岡市東区社領二丁目7番4